

玉光・小森対談

「蓮如をどこから視るのか」

司会

広島の部落解放研究所の企画で「今、なぜ蓮如を論じるのか」という文章を送らせていただいたかと思

いますが、論じる中で何を生み出すのかという、

そちらの方を力点において企画をして、小森部会長と昨日本願寺派の稲城選恵さん、そして今日玉光順正さん、もう一人は龍谷大学の歴史学の福嶋寛隆さんですが、その三人の人に対談をしていたかどうかという事になっています。そのお話をしていたく中で蓮如を論じる、蓮如そのものでもすけれども、論じる事における意味が明らかになればという事なんですね。

どこから切り口をと思ったんですけど、東本願寺の方では「バラバラでいっしょー差異をみとめる世界の発見」が来年の蓮如さん五百年のテーマですね。あれが玉光さんの提案だとちょっと聞いておりますので、そこら辺の事を突破口にしてお願いたしたいと

思います。

（蓮如をどこから視るのか）

玉光 蓮如の五百回御遠忌という事で、せっかく勤めるのなら蓮如の方法でやりたいというような事を僕は前から思っていました。たまたまテーマを考える機会があって、そんな中でこれからの課題、真宗の信とは課題を与えられる事だと思ってるので、そういう意味ではあれは決して答えではなくて、これから我々の課題として「そういうテーマでやろうか」という事を僕は提案したんですけどね。

あの言葉は十数年前、全然その表現は違うんですけどね、その安田理深先生の話を聞いてそれで僕はその言葉を「バラバラでいっしょ」というふうに分で翻訳したんです。それでずっといろんな所で言い続けておった言葉でもあるんです。

西本願寺では「イノベーター上人がやってくる」とか、なかなかユニークな、あれもやっぱり何か今変革しなければならぬと言っ、そういう思いで付けられたと思うんですね、もう少し言えば僕たちはそういう事の中で変革の中身と言っか、その課題として「バラバラでいっしょ」と言っのを掲げたと。

それから、もう一つはやっぱり「差異を認める世界の発見」と言っのは、これも現代の多様化とか、そういうふうと言われている文化の中でやっぱり国際的にも大事な事だし、そういう事を考えると、「バラバラでいっしょ」だけでは分かりにくいという、そういう事もあって、それで、サブテーマとして「差異を認める世界の発見」という、「差異」を「ちがひ」と読んでいるんですけど、それも前からちょっとそんな事をずっと考えている中でそういうテーマがあって、これと一緒にという事で決まったぐらいでね。本当はおそらくそう決まらないと思っただんです。つまり宗門は東西本願寺教団そうなんだけども、「お念仏をしましょう」とか、いわゆる有り難いような言葉で言ったいテーマで言っるのは、それなりの言葉が使われてきたからね。まるっきり違っうので「ちょっと無理かなあ」と思っただんですけ

どね。それが今回は、みんながこれでいこうという事になったんですけどね。小森さんの所へもコメントか何か。

小森 ええ、書いて送りました。どうかね。今、私の記憶ではその標語と言っか、テーマに対して少し批判的な事を書いたんじゃないかなと思っますけど、つまり「バラバラ」という所がね、ちょっと分かり難いというような意味で。どうも私ら昔人間だから感性というよりは言葉そのものの意味。個性にそれぞれ特徴があってもというような、私ら難しい言葉でものを考えるからね。

司会

玉光さんの方から、本にも『運動としての親鸞』と言っのを書いておられますが、そこら辺で蓮如の受け止め方を運動としてこう読むという事を最初にしゃべってもらっ、そこから話しがすめばと思っうんですけれど。

玉光

蓮如という人については、これまでいろんな人が色んな事をしゃべっおっ、僕はそれぞれ本当の事をしゃべっおっと思っているんですけど、蓮如は親鸞に比べてあんまり人気がないと言っのが一般的な見方だし、それがあ意味では宗門内でもそういうふうになってきていと思っうんですね、

東西ともね。いろんな理由があると思うんですけども、一つは特に蓮如の場合はお文なんですけど、お文が読めないと言う、そういう事だろうと思いますね。それはお文をどう読むかという問題になるんですけれど。そういう事とそれからやっぱり蓮如を語る場合は、その蓮如の周りの人たちと言うか民衆との関係の中で蓮如は考えてきたし、あるいはものを書いてきたので、そういうものを抜きにして読んだり、蓮如から学ぶという事はたぶん出来ないだろうと思いますね。それである対談でも話したんですけど、蓮如を評価が出来ないのは私たちが教団も、あるいは知識人も含めて民衆と離れておるからというふうに思ったりしておるんですけども。そういう意



玉光順正さん

味では蓮如の場合は、親鸞だってそれはあんまり自分の事も語ってないから分らないという事があるんですけども、真宗の方法論と言うのは、やっぱりいろんな人と出会ったり、あるいは思想とか学問とか、他の者との出会いの中で作られた訳で、蓮如だってその時代の決して今のような真宗の門徒の中でのことじゃないですからね。そんな中でそれこそ戦いとか対決とか対話の中で作られた思想だし、信心ですからね。そういう意味で僕らがもう一遍考えなければならぬなあというふうに思ったのが十数年前ですかね。

それまで僕も蓮如はやっぱり嫌いだったんですよ。嫌いだったという大変ですけどね。そんな中で考え始めたんですけどね。そのお文が読めないという事のもう一つの理由として、これは蓮如の後の一向一揆敗退以降だと思っんですけどもね。特に信心とか信仰という事が個人的なものに、特に徳川幕藩体制以降の日本の宗教政策の中で個人的なものが信心とか、宗教だというふうになってきて、社会的とか歴史とか、そういうような事を抜きにしてきたと言うか、そういう事と蓮如を評価しないという事とやっぱりつながっていると思いますね。そういう意味で

蓮如という人はその時代の中で、言葉で言えば「運動としての親鸞」を一番表現したと。生活とか、それこそ運動で。だから、ああいう本願寺教団の基のようなものが出来たのは、それは結果であってあんなもの作ろうとして作った訳ではないですからね。そういうふうな事も考えていくと、僕は蓮如という人は面白い人だし、魅力のある人だし、何と言うか、「みんなが言ったようなものではないよ」というふうに思っておるんですね。

それは評価する人たちも、多くの人たちは蓮如が教団を形成した事だとか、あるいは宗教家というよりもオルガナイザーであるとか、あるいは何か実業家のように評価したりね、いろんな評価の仕方が



小森 部会長

あるけども、それも勿論合うとるんだけど、「ちょっとそうでないよ」と。まさに運動としての親鸞とかね、宗教者としての蓮如という事の評価をきちんとやらなければいけないあと、そんな事を思っておるんですね。

小森 私の場合ちょっとコースが、コースと言うか、取っ掛りは「蓮如という人はこれはいたいした人だなあ」というふうに、あんまりものも読まずに、そういう印象を持っておったんですね。それでどうしても自分のこの体験みたいなものから人間というのは考えを持つから、この大変ドロドロした部落解放運動の県連の先頭に立つとか、中央本部の先頭に立ってみて非常に気にかかる事がたくさんあってですな。しかし、そこをよく切り抜けていったと言うか、大きくまとめていったと言うかね。これもあの人の中世にどれぐらいまとめたかという事も私は知らずに、だいたい今日の結果を見てね、大教団になっておるといふ事で、これは大変な苦しみもあつただろうという事を思っただけで、それで蓮如を批判している者の気持ちがよく分からなかったんです、始めは。

それで、こうやって蓮如没後五百年の記念行事が

東西両本願寺で始められるという事で、多少関心を持ちまして、それでよく私も古文は分からないけれど、今われわれが使っておる言葉と当時使った言葉とこのはだいぶん意味が逆になっているものもあるけれど、おぼろげながら手探りのような恰好で可能な限り読んでみたというような事が現在の段階なんです。

それでやっぱり私も今日の日本の人権闘争を進めるといふ立場ですからね。蓮如さんが使っておられる言葉で、あるいは文脈とどうか、論理とどうか、非常に気になる事にたくさんぶつかるとはすよね。それは一つは「五障三従」の問題だしね。それから先生どう評価されておるのか分かりませんけれど、「諸々の神さん」ですな。私あれは本地垂迹の論理の蓮如版だと思っておるけれど、あそこの問題とかね、それからもう一つは、「外に王法をたてて」と言うね、これも簡単に「王法為本」と言ってますけども、かぎ括弧をつけますけど。ここの所がね、じゃあ今日の言葉で語ったら解放運動とすれば、これは相当問題になるだろうと。

そういう何点かね、今日ここで表現したらちよっとこれ難しいと。

玉光

僕もそうですね。だから、その辺をどういふふうに読むかと、つまり僕たちにとって蓮如はどういふふうな拘りの中で、やっぱりどういふふうに読むかというのが一番大事だと思うんですね。それは我々の現代のいろんな問題の中で言っているんです。

僕は例えば「五障三従」なんかもそうなんですけれども、つまり言葉通りに読むんなら、それこそ教条主義だと思うわね。それはもうある意味では分かっている事だね、そんな事。けどもそんな中で、これはそういうふうな言葉を使っておった蓮如の周りに、女性がいっぱい集まってきたというのは、いったい何かというふうな事から逆に、じゃあ僕らがその「五障三従」という事をどういふふうに読むのかというふうに発想しなければあかんと思うんですね。そんな中でそれこそ例えば女性差別の中の何と云うかね、男性中心のような文化、ジェンダーと云うか。そういうふうな事を考えながら読んでいくような、決してそれは読み替えるんではなくて僕の表現では、つまり言葉を現代の言葉で言い当てるようなね、つまり蓮如と同じような課題を持ってそのお文を読めば、そういう読み方がどこま



光明寺の親鸞像

で出来るかという事にかかっていると思うんですね、実際は。そういう意味で王法と仏法との関係があって、これはちょっと少し厳密に考えていかなければならないなあと思っておるんですけどね。ただやっぱりそんな中で蓮如の周りにどんな人たちが集まり、どういう状況を作ったのかと言う、そういう事を学ぶべきであって、それで現代ですと逆に言えば、まさに王法為本のようになって王法に掘め取られておる中で、それを読んで「その通りや」と言っておるのはおかしいので、何かそこら辺の読み方をやっぱりきちんとしなければあかん。僕の表

現では裏から読むとかね、逆に読むとかという言い方をしておるんですけどね。その神社なんかの問題でも実際に神社を軽しめたりする。軽しめるなという限りね、軽しめたりする人がいっぱいおった訳ですよ。それは何故かと言うとそこはやっぱりそれこそ親鸞とか、あるいは蓮如の思想のなから必然的に出てきている訳ですよ。それが「諸宗諸法を誹謗すべからず」とかね、そういう言葉というのはそんな中、そういう人たちがいっぱいいる中で出来た言葉で、掟というのはそういう意味では僕は戦いの中の、もうギリギリの線の言葉だと思っんですけど、それを決して上から「したらいかん」という事ではなくて、戦いを共にしている先頭で蓮如の発した言葉だというふうに僕はとっておるんですね。

ですから、もうギリギリの線を蓮如の場合はずっと考え続けてきただろうというふうに思うんですが、そんな中で言葉というふうに僕は読んでおるんですけど、その読み方を一つ間違えとね、体制的に禁止ばかりを言ったとかね、何か王法に従えというふうにししか読めないのですね、決してそうでなくともうギリギリの線で、やっぱり言っておるという事の中で、じゃあ僕らがどう読むかと言うね。そうい

う事が課題でないかなあというふうに僕ははずっと思っておるんです。

つまり蓮如の時代にどんな人々がいたのかという事。今はお文の通りなんです。神社をかるしめたりする事もないしね。たまたま靖国なんかで少しだけ東西本願寺が何かの戦いをしてますけれど、殆どそういう事ない訳ですよ。それで他の宗派の悪口を言ったりする事もないし。守護・地頭に逆らうという事もない訳ですよ。殆どがね、体制ベッタリになっておる。そういうふうにお文の通りになっておる真宗教団とか、真宗の門徒がお文の時代のような元気がないのはなぜなのかと、こういうふうには考えたらやっぱり今蓮如なら決してそういうふうには書かないだろうと言うのが僕の持論で、それこそ今なら、「神社を軽しめよ」とかね、「諸宗諸法を誹謗せよ」とか、「守護・地頭を粗略にせよ」というふうに書くんではないかと、極端に言えばね。そういうふうには僕は思っておるんです。

これもちょっとついでですけども、蓮如の表現では「今は色々人が集まってるけども、酒飯茶ばかりで皆解散する。これはもうとんでもない事や」と言っておるんだけど、今だったらお寺へ人が集

まっても、殆どそんなバラバラでいるんな人が来る訳でもないし、もうお寺しか行かないような人が集まって酒も飲まないで一生懸命命法して帰ると、もしそんなのを見ると「しっかり酒でも飲んで、もつと元気にやれ」と、こういうふうに言うだろうと言うのが僕の持論ですよ。

(「五障三従」に関して)

小森

あの七ヶ条の制誡、法然上人の時のね。親鸞が八十何番目に署名をした、あの七ヶ条の制誡と、それから十一ヶ条の蓮如の掟ですかね。これとの私は差は運動家として見てね、つまり向こうさんにも一つも利用されるような事のない事だけを法然上人は書いておられるね。どう見てもね、こっち側が主体的にこれを持ち超えなかったら仏法の広まりがもうないし、みんなに正しく理解される事も出来ないという所だけを書いて、それで権力側は喜んだかどうかは分かりませんが、喜ぼうが喜ぶまいが向こうの勝手なんでね。

その七ヶ条の制誡は良く考えてやっておるなあ。それでも何かやっぱり親鸞聖人は「ペコペコ頭を下げるようなことはないじゃないか」というような事

を言ったらしいですけどね。それと十一ヶ条の掟と比べて見たらね、十一ヶ条の掟の方は説明をするとすれば、「諸々の神」という事に対してよね、本地垂迹で神さんが阿弥陀さんの教えを近付き易い縁をもって皆に近付くんだというような説明をする以外ない訳ですわね。

しかし、親鸞のご和讃を読んでみたら、「諸々の神は、我々を守るといふ立場で、守るといふ事は簡単に言くと、どう言うかね、そういう人々の力を借りずにわれらの力で進んでいるんで。向こうは勝手に守ってくれよるんだと、それだけこっちは光輝いておるんや」と、そのような意味でね、どうも神に対する考え方も蓮如上人が腹からそう思ったとは私はいませんけどね。方便という所もありますけどね、しかし、それにしてもそれはね、私は大きな影響を与えるんではないかと、そういう考え方はね。神さの問題はそう思うんですけどね。

結局、この五障三従になると、確かにそれを裏から読むとか、あるいは深く宗教哲学的にね、言わば論理の逆転フォーマーみたいな形で考えて見たりする事が非常に大事だと思ふけれど、結局われら大衆と接する時にね。今、業とか宿業という事を問題に

してますけども、五障三従という事になると、いわゆる俗に言われる悪しき業論のどう言いますかな、克服なしにはそれも成り立たない事なんですよ。それでどういふ芽があるだろうか。それを逆転させるにしてもね。逆転展開をさせるにしてもね、どういふ芽があるだろうかという事をどう言いますか、この蓮如五百年の記念行事の時にね、東西両本願寺は、そこを究明してやるべきではないかと。何でもかんでも大騒動だと蓮如さんの五百年であると言っただけではね。これはかえって最眞の引き倒しですからね。

玉光

僕もそう思いますね。そういう意味ではね。だから、その辺がつまり特に五障三従の場合は言葉通り読めばね、それどうしようもないのでねただ僕は非常に大雑把なんですけれど、つまりその時代に女の人を五障三従の女人呼んでいたという事は、つまり我々の時代だって、それこそ男社会の中の女性というものを、蓮如時代は五障三従の女人という言葉で言っていたというふうに読んでおるんです、僕の場合は。

そんな中で女性の救いとか言っておるのは、僕らの言葉で言えばまさに女性解放とか、そういう事を

蓮如は考えてそれを僕らの言葉として、どういふうに表現出来るかという事を読まないといけないと、ただ、そういうふうに通読しておる人は今ないのでね。いろんな所でその話するけれど、どこか書いてあるんですかと言われても、何処にも書いてないし、だからそれをやっぱりやらなければいけないと。それが今の五百回御遠忌のそういう意味では一つの課題なんです。で僕は五障三従の女人というのは現代の女性の言葉としたらね、何と言うか、それこそ性差別のある女性という事を言っておるのであって、それ以外の特別な事を言っておる訳ではないといふふうには僕は読んでおるんですよ。つまり、まさに女性差別されている事の形容詞のような事として読んだらどうかと、僕は思っておるんですね。

けれども、普通はそうではなくて「五障というのは仏になれない」とかね、それはその通りなんだけどね、そういう読み方はもうすべきでないといふふうには。

小森

一つは、それが現代の一般民衆にどういふふうな思想的影響を与えるかという事もわれわれとしては注視しなければならない。これが一つポイントなんです。それで私もさっき玉光さんが言われるよう

にね、形容詞的に読めばよいではないか、という論理がある事は頭に浮かんでおるんです。それでね、結局これからしっかり研究してみねばいけないと思ふんですけれど、何十カ所、五障三従を使われておるか分かりますけれども、その年代順にですな、ずっと並べてみて、始めは好意的に読めば「五障三従といわれている女性諸君よ」とね。「君はそう言われておるけれど、実際は救われる道がある」と。それはちょっと手続き上のややこしい問題があるけどね。ずっと終りごろになると玉光さん、私はこれは思い込みもあるかも知れないけれど、蓮如さん自体がね、「そう五障三従と言われておるけれど、女性諸君心配するな。あなたは往生出来ますよ」と言う言い方からね、あの人自身のどう言いますか発言としてね、「君ら五障三従の身ではないか」というような雰囲気からね、ずっとこう変わっておるように思ふんですよ。それもまだ断定は出来ないけどね。そうなるに蓮如さん自身でも何十回もそういう言葉を使い、何百回も人の前でものを言っておれば、そういう事にだんだんのめり込んでいく恐ろしい思想だと思ふんですよ。

そういう意味で現代のわれわれがね、その事も考

慮して取り組まなければいけないと。

(「お文」(御文章)をどこに立って読むか)

玉光 それは、つまり蓮如の場合もかなり前半と後半と
言うか、晩年やっぱり変わっておると思うんですね、
そういう意味で。それこそかなりオーバーな所もあ
るし、「自分は功成り、名をとげた」、ああいう表
現とかね、いろんな表現がかなりいやらしいと言っ
か。そんなのがやっぱりありますよね。それは完全
なものはないんだから、そこら辺をきちんと押さえ
ながら読んでいかなければならないと思います。蓮
如の言葉なら絶対であると、それは僕は親鸞だっ
そうだしね、そういうふうに教条的に取ったらいけ
ないと思いますね。ですからそれは決して蓮如より
こっちの方が良いというのではなくて、やっぱりそ
の辺の事非常に大事な事で、それこそ何と言っか信
心の眼とでも言うかですね。そういう眼でみていか
ないとならないと思いますしね。

だけど、そんな中で僕らが学べるのは何かとい
ふに、僕の場合はある意味ではおかしな所は捨て
とる訳でもないし、何か晩年の蓮如のやり方おかし
いとか、ひょっとしたら僕らもそうなるかもわから

ないなあと思いつながら。けども、それを見る事に
よってね、やっぱりそうなのはいけないというふ
うに思ったりする訳ですけどね。

小森

私は直接のどう言いますか、宗門の僧侶というよ
うな立場でもないしね。ちょっと私の考えは欲な所
があると思うんですけど、例えばこの西洋哲学で
言ったらヘーゲルが「現実的なものは合理的であり、
合理的なものは現実的である」と言いましたが、こ
れも読みようによつたら全く保守を合理化する。結
局キリスト教のどう言いますか、ゴッドやね。ゴッ
ドのあるがままに動かされた、だからそれは合理的
なんだというふうに読めなくもないけれども、その
後に『フォイエルバッハ論』の中で、特にエンゲル
スが「現実的なものは合理的であるという事は、不
合理になつたら非現実的になるんだ」と。だから革
命を示唆しておると読むべきであると、こういう展
開しますわね。私は少年時代に「これはたいした
展開じゃなあ」と。そうなるよね。マルクス・エン
ゲルスの思想のどう言いますか、聡明さにも感銘す
るしね、そうするとヘーゲルをくさそうという気
に
ならんのですわ。「ヘーゲルという人もたいしたもの
のだなあ」と思うんです。それと同じような展開が

ね、蓮如に対して、今のこの宗門の關係者や学者達がそういう展開が出来たらね、それはあの人の良い所のエキスがずっと広がるんだけれどね、「おっと何を言っておるか。蓮如さんはこういう良いところがある、良かったんだ」という所でパッとガイドラインを作るとね、それはやっぱり本当の蓮如の思想、特に私が最近に思った「非常にこの人は苦勞しながらいろいろな事を言っておられるなあ」と思っておった事がね、「いや、これは逆に突っ込んで批判しないと、やっぱり世の中に対してあんまり良い影響持たないなあ」というふうな感じがしだすんですね。

玉光 その通りですね。だから、そういう本当に逆転するようなね、そこが僕は最初に言ったように蓮如を読む、読む人たちが僕はお文なんか運動の中で読めと言っんですよね。それは今お文というのは元々僕はそういう儀式そのものが、ある意味で運動だった訳です。それこそ信仰運動でそれは我々の人権運動でもあった訳ですよ。ただけでもう今はそうでなくて形骸化してね儀式の中でお文なんかか読まれる訳ですよ。そういう読み方では僕は駄目だと思えますね。そのお文の読み方するのは。運動の中で読んだ時にお文が生きてくるので、そういう読み方

をしておる人はない訳ですよ。極端に言ってしまう。だから、誰一人お文はきちんと読んでおる人はないと僕は勝手に思っておるんですけどね。そういう意味では本当に運動の中でお文をどこまで読むかという事が、僕らの課題として与えられておるので決して、儀式の中で読むものではないと。それはやっぱり書かれたのも、戦いの中で一向一揆の中とか、その中で書かれたのであって、決して机の上で座って頭をひねりながら考えられたのではないだろうというふうな事を考えながら思うとね、何かそういう意味では今小森さんが言われたような何か逆転というのは、これからという感じですね。

小森

そうしないと蓮如の全面否定と、それから全面擁護とに二局分解をしますね。それで昨日は稲城先生と、年が私とだいぶ違うから、あの人もなかなか大らかな所がありましてね。今日のこのような雰圍気の議論ではなかったんですわ。もうちょっと大雑把なアバウトな話だったですけどね、結局「そりゃ、もうとにかく時代背景が違うんじゃないか」という事が主だったですな。その論理的な行き詰まり状況の説明は。それと年を取った人の独特のどう言いますか、細かい事もあんまり「良いじゃないか。こ

これまで教線を広げた、これだけ広げられた人だから」。ちょうど本願寺の薨を見ながらというような場所ですからね。そりゃ、そういう議論の世界もあっても良いと思うんですけど、まだわれわれの年齢からすると、それから生の^{なま}大衆運動との接触という事になるとね、もう少しキメ細かい論理的対応でなければね。それでいろいろ私は尋ねてみたんですけど、非常到大雑把な、教学は詳しいですよ、あの人は専門だから。しかし「蓮如の時代が違う」と言われれば時代背景をもう少し説明しなければいけないと思うんですけどね。そういう点は昨日はちょっと思うようにいかなかったんですけど、しかし双方に認識は深まったと思うんですよ。

玉光 だから、やっぱりそういう意味では蓮如という人は運動の中でしか読めないなあと言う思いがあつてね。そういう人に次々読んでもらわないといけないなあ、僕は思っておるんですよ。それは五障三従の問題だってね、女の人にやっぱりきちんと読んでもらわないといけないというふうに僕は思っているんですけどね。

小森 そういう点はね、稲城先生は「女性は大変なんよ」と、女性は子どもを育てるしやな。それから本当の

どう言うか、親子の情のこの交わりというものがね、乳を飲ませながら子どもに影響を与えていっている所を、これも人間の生き方として大事なんだから、その大事なものに対して、大事な人たちに對してどういうふうに関心を広めていくかという事で、もう一生懸命話した。「おい女性よ、女性よ」という意味で五障三従と言われたんじゃから、「まあ良いじゃないか」と、「そんな事はそれ差別になるか」と言われましたわ。「まあ差別は良いけど、ちょっとそこらを先生もう少し厳密に考えないといけないのではないか」と言ったんですけどね。

玉光 女性の問題ではね「蓮如はなぜ女性に拘ったか」と言うのはね、これは去年、町長選の選挙をしたんですよ。友人が出て、負けたんだけど、その時にやっぱり力になったのは女性ですよ。特に若いお母さん方を中心にする女性ですよ。僕はやってみて、それで蓮如は何故あんなに女性に拘ったのかと言うのが、やっぱり分ったんですよ。と言うのは、つまりそれはやっぱり僕は蓮如の信仰運動の中でそういうふうにはやらざるを得なかったと思うんですよ。男にはいるんな、^{しがらみ}柵があつたりしてですね、もうどうにもならない部分がいっぱいあつてね、そんな中で

女性がどういふふうに働いてね。そういう事を考えた時に、僕は蓮如のことを「あつ、そうか」と思ったりもしたんですよ。それはね、これは大谷大学の大桑さんと話していた時にたまたまちょうど同じような事を考えていて「あつ、そうや」と思ったのは、「蓮如は何をしたんだろう」という話の中でね、大桑さんは、「今の言葉では地方自治や」と言うんですよ。そうやと思えますね。つまり決して上から全体をというのでなくてね、それこそ講とかお文とかというのはそうなんですけれど、それぞれの地方地方の中で、いろんな事を考えていって、そういう事がたまたま広がっていったと言うか、たまたまでなくってそれは広がるべくして広がっていったんだけども、そういう事で言えば、講の組織、宗教的ネットワークですけれどね、その当時の。だから今だって僕は選挙した時にね、こういう方法でやっぱりやっていくと言うかね。それは僕はその時は決して何も選挙の時に特別の事を話した訳でもないし、それでも自分にとっての親鸞とか蓮如を、そんな言葉は使わないけどそれを話をするしか出来ないし、そういう形でやっただんですけれどね、だから何かその勝つ負ける事は別にして、「あつ、こういう事だなあ」とい

うような感じを持ったんですよ。それはその時たまたま「地方自治みたいな事やっただんではないですか」と言われてね。「あつ、そうかな」と思っただすね。それは蓮如の場合のお文とか、講の教団と言うのはね僕の表現で言えば共学・共生・共闘の集団ですよ、講と言うのはね。

僕は例えば市川町なら市川という町をやっぱり何とかする事にね一生懸命やりたいしね、それは解放運動なんか本当にね、その時みんな一緒にやってみてね、これはひょっとしたら新しい町づくりが市川から始まるのではないかというぐらいに思いながらやっただんすけれどね。そういう事と僕は蓮如の運動と言うのは、蓮如だけでなくて親鸞の運動と言うのはやっぱり僕の場合は重なっておるんですね。それで非常におもしろいなあと思っておるんですよ。

（「後生の一大事」に関して）

小森

方法論とすれば、そりゃ私も今まで大衆運動の先頭におってね、蓮如さんの講という事については「なるほど」と、そこから知恵をもらうものもたくさんありますわね。ただ問題は点検しなければなら

ないのは、今のような神々に対する考えとかね、あるいは五障三従という言葉づかいですな、そういう問題とかですな、よく言われる王法為本の問題の自身、こういう中身がもしその時代背景だとわれわれが説得して納得して、それが逆転フォーマーになる程の思想的な芽をね、今日の時代から見て、「こんな思想的芽があるんや」と、今日説明が付くようであれば逆のぼってその時代にそういう影響を与えておる訳ですから。そういうものでないと、蓮如さんは方法論が徹底をしておるといふ事になると、ちよっと創価学会と変わらん事にならないかとその心配を持ちますね。それから共産党のあのしぶとさね、ああいうものと似てくるからな。

それで今の学ぶべきもの、その手段方法ね、運動家としてもピンピン私はきます。けれども、それを消化するといふ事と同時に自身の再点検をして、どうやったら今の人にも理解が出来、「あー、蓮如時代はあーだったんだなあ」といふ事を逆のぼって納得のいくようなものをわれわれが発展さすかと。

そのためにはやっぱり悪い所の総ざらいを先にしなければいけないと思うんですよ。私は今そういう心境なんです。親鸞の場合ですとね、現生不退

とか、現生不退転とか言いますね。私はこれは感覺的に現生正定聚というのは、「生きておる間が大事も」と。後生の一大事もそう読めるんですけどね。しかし、後生の一大事の説明部分になるとね、皆死後の世界を扱っておるんですよ。

例えば白骨の御文章、これは無常観という事では良いですけどね、取り急ぎ「あの世の事を頼まにゃいけん」という感じに最後になるから、どうも蓮如さんの言われる後生の一大事と親鸞聖人の言われてきた現生正定聚という事はちよっと重点の置き所が違ふ。親鸞聖人の場合は現生へ六、七割かかっておって、蓮如の場合は六、七割がああ世にかかっておると。ああ世にかかっておる事がまた同時にですね、五障三従と非常に深い関係を持つんですけど、悪しき業論でないと説明のつかない言葉を使われて、五障三従と言っておられるといふような事を総合的に見るとね、どうやって芽を引き出すだろうかと。そのためには先ず問題を一遍全部さらけ出して「ここが問題ですよ」といふ運動をした上で今日のものが叡智を絞って哲学的思索を巡らせてこう発展するといふのを出さなければいけないのではないかなあ。

玉光 それはそう思いますね。

小森 それでね、玉光さんのあの書かれておる、本ですかな。あの一番最後の辺にね親鸞の言葉引用されておる。あれは私は非常に良いと思ったんですけど。なァ。「先の者は後を導き、後の者は先を習え」と。つまりこれは人類の営みとして連続しておるといふ事ですな。私はこれを親鸞聖人が現生不退と、生きとる間に事をなさればならないという考え方はね、やっぱり生きている者としての連続性と言うかね、そりゃ宗教家だから「あの世」とか、「魂」とかいふようなものを抜きにしたら、そのままだったら宗教ではないと私もそう思っている。だから私は曹洞宗と議論する時にそれを私の方から逆に注意した事がある。だから、それは高度に概念化された実態的なものではないという事をお互い宗教哲学を知る者は、前提としながらの議論だけど、「あの世」という事を議論しない者は宗教にならないからね。そうすると蓮如上人の事を後生の一大事の所で先ずは誉めるのでなくて、そういう精神を親鸞聖人との連続性の精神というものをどう引き出すかと。

玉光 それでね、後生に関して言えば、親鸞は後生という言葉は使っていないですよ。後世と言う言葉です

からね。ただ蓮如の使っておる場合は後生という言葉は今生に対して使ってますね。今生というのはそれこそ「今生にのみふけりて」とかいふような言葉で、つまりそれは「今生にのみふけりて」という生き方と、後生の一大事を頼んで生きる生き方は違う訳で、つまり今生と後生が別々のものでね。今生は現世の事で後生は死後の事という使い方ではないと思います。つまり今生と言葉を使っているのは、「今生をのうのうとするのはだめだ」と、こう言っておるのですから、今生をのうのうと生きない生き方を、後生という言葉で言っておるのですね。そういうふうにかけておるんですけども。

僕は今、そのことを、向こうから来る「いのち」、時間がそれこそ過去から来た時間と未来から来る時間があるというふうには僕は思っておるんですが、それは未来から来た時間と言うかね、そういう事で僕は後生と。そういう事を考えながら生きると言うね生き方というのは。

これはね、エイズで亡くなった石田吉明さん、彼が「人間は砂時計を持っておる」と言うんですよ。「みんなそれぞれ砂時計を持っておって、それは砂時計は逆さまにかえらんものですからね。その砂時計

計の残りを意識しておる人ほど輝いて生きておる」というような言い方までしておるんですけどね。やっぱり砂時計の時間というのは、向こうから来ておる時間で確実に減っていつている時間ですよ。そういう事を意識して生きる生き方と、それから今生をどこまでも伸ばしていこうと言う、臓器移植までやろうという生き方とは違ふと。そういう事が僕は今は後生の一大事という言葉で思っておる事です。私はそのいう今生と後生という関係で言えばね、それこそ歴史的に過去・未来・現在。それから空間的にもね日本から他の国とか、そういう事を考えたものとして後生という言葉は僕は蓮如からは学んでおると言うか、読んでおるんですけどね。

それで今小森さんが言われたように、それは例えば親鸞だって浄土という言葉の使い方が一般的な使い方と、それから自分で力を入れて言う浄土という使い方とはやっぱり違いますからね。それでその通俗の言葉の使い方の場合とやっぱり違って読まなければいけないと思うし、例えば「親鸞は浄土をどういう事と言ったのか」とかね、そういう事をやっぱり考えるけど、僕は勘でしゃべっている訳ですから、その辺をそれこそきちんと押さえてもらわないとい

けないなあと思っておるんですけどね。

小森

それで私の方からちょっと改めて尋ねさせてもらうんですけど、私は蓮如上人の後生の一大事をうんと生かして、ぜひ哲学に生かして受け取らせていただくとするばね、いかに合理的にこの人生を効果的にすな、そもそも自分一人の今生に更けるような態度でなしに少々苦しい事も含めて自分も充実しないといけないが、後々の人に充実した事にしないといけないという。例えば大宇宙自然の事言えば公害でこの地球を侵してはいけないというような事も含めてですよ、やらないといけないと思うんですが、それ以外のことは関連的な極めて高度に概念化された次の世という事ですけれど、そこらのつながりは玉光さん、現役の宗教家としてはどうですか。それはもうその所をよう乗り越えないんです。私は。死後の世界というものは、これはそれこそ無記名ですけどね、行ってみないと分からないですから。だから、今言った公害とかね、そういうつまり次の時代に責任を持って生きるとか、あるいは過去の事に対して責任を持って生きるという生き方ですよ。それはつまり業を果たすという事でもあるしね。それは現代だって隣の国の事とか隣の人の事に対して

責任を持って今を生きるという、私を生きると言うね。そういう生き方を例えば蓮如の場合は後生の一大事という言葉で言っておるといふうに僕は読んでおるんです。

ですからそういう意味では自分は死んだってそれこそ次の時代の人たちに對して、今やっておかないといけない事がいっぱいある訳ですから、そういう意味では今小森さんが言われたような意味で、それは公害問題であっても、環境問題であってもそれは自分たちの責任ですからね。それと同時にそれこそ過去の差別の問題だって、それは同時に僕たちがどう今生きるかという事の問題であるというふうには考えなければいけないと思うし、自分ではそう考えようと思っっているんですけどね。そういう意味で決して後生というのは向こうだけの事ではなくて、それこそ過去と言うか、そういう事も含めてね、つまり今生というのには生きておる時だけです。けれども、後生という言葉にはね過去もあるだろうけども、その後ろもあると僕はそう思っっておるんですけどね。

(「王法為本」に関して)

小森 そうそう、それはつながってますからね。連綿としてつながってますからね。それがこの本に玉光さんが最後にちよっと出されておる、親鸞の言葉ですな。あれ私はそういうふうにあの言葉は読ませてもらっっておるんですけどね。それで例の王法の問題ですけど。

玉光 だいたいね、王法為本に関しては文明の六年からね十年ぐらゐまであるんですよ殆どが。一つだけは後年のもんがあるんですけど、それは王法為本というふうな使い方ではなくてね、使っっておるんですけどね。

小森 王法為本という言葉でなくて王法を尊重しているような、例えば守護とか地頭とか、少し尊重したような言葉つかいまで入れると、十二カ所出しています。私は思想の一貫性としてね、二十ヶ所もないかも知れませんが、十六から十七ヶ所あるのではないかと思っっておるんですけど。

それで、中世のあの頃というのはそれは凄く莊園制が崩壊をして、守護請だ、地頭請だというのが重なって来てね、農民が税金の二重払いみたいなものをしてなければいけないような苦しい時期ですよ。

だから一向一揆のみならず十五世紀でもちょっとした年表を調べてみてもね、八十回も九十回も一揆が起きているんです。そんな中で十ヶ所ぐらいいはおそらく一向一揆の系統だと思えますけどね。これだけの人が苦しみ悩み立ち上がらざるを得なかったという事について、あんまり蓮如さんは心が痛まなかつたんだろうかなと。王法を先としとか、それから年貢を払えとかね、それから普通のいわゆる今日で言えば国税とか県税とか市民税とかいうものでなくて、他に何々税、何々税を払えと言われるのはね、仏の慈悲心から言ってその所があつたらちよつと私とすれば言いにくいと言うかね。私も解放同盟の会費の値上げの時にどうするだろうかと思つて書記長しておる時にね、執行委員会とか中央委員会で悩みましたかね。そんな事を考えると蓮如さんは割合簡単に言つておられるが、仏の慈悲心としてどうですかね。

玉光 僕はそれはね、これは勝手な解釈ですが、「どうでも良い」と思いながら書いておると思ひますがね。書いておる事はね書いておるんだけど、「そんな事は銘々の勝手にせよ」と言いながらね書いておると僕は読んでおるんですよ。

僕はね、おそらくそれは戦つておるとそんなことがあると思ふんですよ。それは何も「言う事聞け」と言つて書いておる訳ではないんですよ。まさに方便と言うか、つまりそういうものだったと思ふんですね。これは勝手な読み方で、そんな事を言つたて誰もね「そんな読み方ない」と言われたらそれまでだけでも、つまり蓮如と同じ課題を持つたらそうなるだろうというふうには僕は思つておるんです。

小森 それでね。そう思つてみたいと私も考えたんですが。しかしながらずつと読んでいくと、「これ分らない奴は当流とは縁がないよ」と言つて最後にとどめを刺す所がそれも何ヶ所かあるんですよ。それで「これは困つた事やなあ」と。そりゃ私らでもね、「おい自民党に良いように言つておけや」と。

こつちの方で出る者が誰もおらんのなら、選挙の時に「ちよつとしたれや」というのを、あの社会党、総評の華やかなりし頃でも、「そりゃあええじゃないか」ということがある訳だから、そりゃ分らない事ないですね。しかし「これをやらなければならなかつたら、解放同盟のためにならないぞ」とはよく付け加えないからね。そこらの所の問題ですわね。玉光 やっぱりね、その今の王法の問題に関してね、

文明六年から十年というのはね一向一揆が始まって、ちょうどそういう時代に集中して使われておるんですね。だから、そこら辺の事を考えると、そういう意味では自由奔放と言うか、「まあ書いておかんかい」というような事も考えられるし、十分僕はそうだと思うんだけど、だけどその事を後から読む我々にしたら、「こう書いてあるから」というふうに、それこそまさに教条的に読まざるを得ない部分があるしね、非常に面倒なんですけども、そこら辺はある所は大雑把にいった方が良いじゃないかというのが僕の勝手な受け止めです。

例えば蓮如のお文の中に「外相にその色をみせぬように」とか、それから「内心に仏法をたくわえろ」というような、僕の読み方で言えば、本当の信というものは外相に色を表さざるを得ないんですよ。

だから、そういう意味では深く内心に仏法を蓄えていない者はすっかりだから外にも表現が出来ないですね。つまり印しるしがない訳ですよ。だから、そういう事を今考えたと裏から読むとか、逆に読むというような、そういう意味でもっと色々表現をして教団なり、あるいはそれはもっと言えば真宗門徒としてと言うかね、「自分はこうだ」という事を

表現をして、それでその事に対してみんな批判があった訳ですよ。それを受けて蓮如はある意味では「適当にやっておけ」と権力に対してはね。そんな意味でも手紙はいっぱいあると思うんですね。だからそれが無い我々がそのまま読んで字ずら通りに教条的に読むからおかしいので、やっぱりその違いを僕もそれこそ十数年同じ事を言っておるけど、誰も「そうだ」とも言わないし、「間違っておる」とも言わないんですよ。そういう違いというのがやっぱりあって、そういう意味で僕らのまさに信が足らないのであって、外相にその色を表さずと、今表れておらんからそれで良いんかと言うと、そうでは全くないのでね、もっともとお文から、そういう意味での読み取りをしないと駄目だろうというふうに思っておるんです。そういう意味では結構それこそ五障三従の問題だって、もっともと違う読み方が出来るだろうし、そういう事を僕は思っておるんですけども。なかなかそういう事をやる人がないんですよ、本当の話は。

小森

だから、信心が内に充滿しておれば意識的に出そうとしなくても、それこそ自然の形で何らかの形で人に共鳴、共感のしぐさというのが出てきますわな。

ところがあの御文章によるとね、「それ出すな」と、それしか書いてない訳。そうすると玉光さんのように、キチッと内に蓄えたものがあつたら、肩怒らせで、いらぬトラブルを権力と起こさなくても良いじゃないかと、それはするなと。本ものは浸透するんだという事までちょっと五、六文字書いてあればな。

玉光 それはなぜか、つまりその時代の人はそんなのばっかりだったからですよ。それこそ他宗を誹謗するわ、守護・地頭を粗略にするわ、神社を軽しめるわ、そんな人ばかりだったから書いておるんですよ。そうでなかったら書く必要なんて何も無い。権力に逆らう者が無いのに「権力に逆らうな」って書くはずがないですよ。だから、もうどこを見たってどうにもならないと、それは「外相に表すな」というような事を書いた」と、僕は読んでみた。もし本当にそんな事ないんだつたらね、掟なんか書く必要ないですよ。だけど何故書いたかというのと、つまり蓮如の集団というのはいかに訳が分からない集団であつたかという事だと思ふんですよ。だから一向一揆とかそういうものもある必然で起こってきたんですよ。

少々何人かが出来の悪いのがおるといふぐらいの事だつたら書く必要ないんですよ。つまり圧倒的多数がそういう事をやっていた訳ですよ。それで書かされたと言ふか、自分でも書いたと言ふかね、そういうふうには僕は思ふんですよ。もしそうでなかったら僕は書かないだろうと思ひます。そういうふうには読んでいくと、じゃあ今の我々はどうかといふふうになるんですよ。

小森 それはちよつと私とすれば直ぐそこへは賛成をしかねますが、全部がそうであつたといふ、そうであれば何故蓮如が情熱を燃やしてやな、そういう非常に困つた方向にあるものをね、この教団を広めていこうとされたかといふ事に疑問が出てきますからね。だから、あの時代と今の解放運動とちよつと似た所もあるように思ふし、非常にこの墜落した面があるでしょう、解放運動のね。特に自分で自分の首を絞めるような今日の総保守化の方にずっと寄つていっておるんですよ、そうするとその批判の限界というものをやっぱり私は感ずるんですよ。私は割合奔放に批判しておりますけどね、それでもなお正しい芽をどうやって伸ばすかといふ事で、すべての所を「こうだ」と言つて、例外と言ふか、正しい芽

を伸ばすための一言が今欲しいと私が言ったのはそれなのです。蓮如さんは全部がそうだからそう書いたんだと、簡単によう割り切れないんですね。

玉光

つまり末端もそういうふうには神社を誹謗したり、粗略にしたりしていたのが信心を大事にする事ですよ。それをみんなしておつたんですよ。何かトップクラスとか、そういう一部分が悪い事をしておるのではなくて、つまりその事を蓮如は認めておるんですよ。認めてその上で書いておると僕は読んでいますね。

小森

それにしても何故そうなるかと言ったら、これは私は無碍の一道という言葉で表すんですけどね。その信心の障害になるものはおらんと言って一応非常に浅い意味の信心かも知らないけど、阿弥陀如来の誓願されておる他力の信というものに信順してです、言っておるから無碍の一道という一種の確信を持つという事は、私はこの宗派にとつては大事な事だと思つておるんですよ。例えば部落解放運動で言ったらね、「われわれの言っているのは市民的権利の問題であつて人類普遍の原理だと、何を君はでたらめな事を言うか」とかね、「差別性を何と思つておるか」と言うのはね、これは行き過ぎておつてもそれ

は非常に大事なエネルギーですよ。そうするとそのエネルギーというものを一面大事にしながら、一面行き過ぎておる所を直していくと、私はどういう表現を同盟の方針書で言つたかと言つたらね、「真に部落を解放するに足りる主体的力量」、本当に部落を解放できるような主体が大事なんですよと、単純に「主体、主体」と言つたら本願ばかりみたいになつてしまつて暴走するから、だからその事は自己コントロールの能力でもあるんですよと、自分の方に向かないといけないんですよ、という意味の事を言つてね、私なんかもずいぶん苦労しましたけど、蓮如さんはパッパッとやっておられると、そう思うんですよ。そこらの註釈と言つか、出来れば註釈でなくてそこに本当に論理的に発展させる芽を見つけて出すことが出来たら一番良いかも知れない。

玉光

そうですね。それが何故出来ないかと言つと、つまり課題を持たないからですよ。つまり蓮如と同じ。それで言い換えるのと言いつてるのと違つてですよ。本当は言い当てなければいけないんです。そういう意味でもやっぱり現代語訳がお文なんかでも今大事なんですけどね本当に。今あるものをみんな読んでおる訳ではないですけど、これは売れない方が良い

なあという本ばかりですよ。売れないから良いのでこんなもの売れたら大変や本当にね。僕はそういう感じを持っておるんですけどね。

(播磨での蓮如の伝承)

小森 たくさん出ておるわな、蓮如の。それで昨日も本願寺の本を売っている所があるでしょう、図書販売所が、それはもう蓮如づくめやなあ。ちょっと手にとって見てね、「私の方がちょっと変になったんかなあ」と思うぐらい、全然私とは逆の事を書いておったわな。

時間がだんだんなくなるから、ちょっと私この播磨に来て、もし縁があつたら聞きたいと思うのは、蓮如さん播磨まで来ておると言うのかな。

玉光 いや、播磨へは直接蓮如は来てないですね。

小森 使いですか。それお母さんを探しに。

玉光 一応そういう話なんですけどね、それで空善が姫路を基盤にして御坊を建ててね、だいたいこの辺に真宗が入ってきたのはだいたいその頃。ちょっとこの市川の北に蓮如名号の石というのがあるんですけどね。

小森 その石碑は古いですか。どのくらい。

玉光 そんな古いという事ないですよ。

小森 うちの方は備後ですけど、備後はもういっぱい

い伝えがあるんですけど、蓮如さんにまつわるのは。

玉光 やっぱり北陸の方なんかでも凄くいろんな言い伝えがありますね。蓮如のね。北陸へ研修会に行った時に蓮如の御旧跡みたいないろんな言い伝えみたいな事を聞かせてもらったことがあります。

やっぱりお文なんかの本当にきちんとしたね現代語訳が出来れば良いんですけどね。それなりにみんな五百回法要をと思ってやっておるんですけど、みんなバラバラで、みんなそれぞれ自分の言っておる事を五百回をタネにして発表しておるぐらいの話ですね、実際の話。

小森 そうそう、みんな。

玉光 だから、そういう意味ではちょっとキチンとしたいろんな角度から一緒に考えて何か出来るような事業を本当はしなければいけないですよ。だから東西本願寺一緒になってとかね、本当にもっとそういう事をやるべきだと思っんですけどね。なかなかそうはいかないですね。今度大谷派の機関誌では一応テーマを中心にして蓮如の五百回御遠忌という事で、いろんな人と宗門関係者と外の人との対談を考えておるんですよ。シリーズにして、「蓮如上人に

ついて」と言うことで。いろんな今の現代の問題を中心にしてやるうかと言っておるけどね。

小森 本日はどうも有りがとうございました。いろいろと数えられる所がたくさんありました。

(一九九七年七月三十日光明寺にて対談)